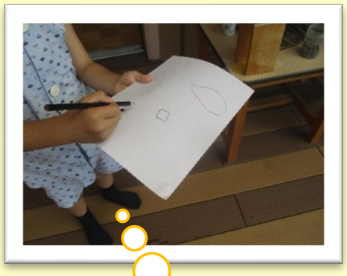
「自分の世界で没頭して遊ぶ」

こどもたちの遊びの様子を見ていると、一人で黙々と遊ぶ姿を見かけることがあります。その時、こどもたちの内側にはどのような世界が広がっているのでしょうか。一匹の虫と関わるＧさんの姿を通して、自分のやりたいことと向き合っている時のこどもたちの内側の世界について考えてみたいと思います。

Ｇさんが園庭でテントウムシを見つけると、近くにいた教師に「テントウムシはね、鉛筆で丸を描くとその中で止まるんだよ」と話し始めました。「幼稚園には鉛筆がないから、黒い色を使おう」と保育室の中へ戻り、白い紙と黒色の色鉛筆を持ってテラスに来ると、持ってきた紙に何かを描き始めました。

まずは大きな丸を描き、その中にテントウムシを離してみるとすぐに丸の外に逃げてしまいました。何度か繰り返してもうまくいかず、次は、動いているテントウムシを囲むように丸を描いてみました。しかし、また丸の外に逃げられてしまい、何度、試してもうまくいきません。「なんでだろう」とつぶやきながら、次は描く形を四角に変えてみましたが、それでもうまくいきません。



こうやって描いたら動かないはずなのになんでだろう。もう１回やってみよう。

最後に、丸を何重にも重ねて描き、その中にテントウムシを入れてみると、テントウムシは丸の淵で止まりました。Ｇさんは興奮した様子で「ほら！やっぱり止まったでしょう！」と教師にテントウムシを見せに来ました。

次は、違うやり方で描いてみようかな

Ｇさんは、「虫を捕まえること」へ興味があり、５歳児になっても興味の近い人と一緒に虫を捕まえることや自分の知っていることを友達と共にすることを楽しんでいました。この日は、教師へ自分の知っていることを話したことをきっかけに自分の気になることとじっくりと向き合い、自分の思い描いたようになるまで何度も試してみる姿がありました。正解、不正解ではなく、「こうやってみたらどうなるのか」という自分の中の疑問と向き合い、試してみる中で、うまくいかないこともＧさんにとっての面白さの一つに変わっていったのではないかと思います。一人の世界に没頭することで、自分の中にある思いと向き合いながら、「もっとやってみたい」という気持ちが大きくなり、遊び込む姿につながっていくのではないかと考えます。　（石関　萌）